

国際隕石学会：その現状と将来

海老原充¹

1. はじめに

隕石学会は1933年8月にアメリカのシカゴで発足して以来、今年で62年目を迎える国際的な研究者組織である。設立集會に参集した人数がわずかに15人であった学会もいまや1000人を擁する会にまで成長し、依然アメリカ中心の組織であることは否めないまでも、ヨーロッパやアジアからの会員数も増え、実質上も国際学会の色を強く感じさせる。日本人の会員数も増加を続け、今やアメリカ、ドイツに次ぐ会員数を数えるまでになった。本稿では国際隕石学会の実体を一人でも多くの惑星科学会の会員の方に知っていただくべく、その概要や最近の動向を記した。

2. 会の沿革

隕石学会は1933年8月21、22日にシカゴのフィールド自然博物館でFrederick C. Leonardを中心に結成された。初代会長にはLeonard自身、Secretary-TreasurerにはHarvey H. Niningerがそれぞれ就任した。当時LeonardはUCLAの天文学の教授をしており、Niningerは在野の隕石研究者・収集家でデンバーに居を構えていた。ロスアンゼルスでもデンバーでもなく、シカゴで設立集會を開いたのは、当時、シカゴのフィールド博物館の地質学のキュレータをしていたOliver C. Farringtonの呼びかけによるところが大きかった。Farringtonは1915年に"Meteorites: their Structure, Composition

and Terrestrial Relations"と題する著書を完成させた。これはアメリカでこの分野の学術的な書籍としては初めてのものであったが、出版社が見つからず、結局自費出版を行って興味を抱きそうな人に贈呈した。Farringtonはこのように隕石研究の分野で当時、最も優れた研究者として知られていたが、残念ながら設立集會には病いのために出席できず、数カ月後になくなった。設立集會において、Farringtonは名誉会長に選ばれた。当初の会の名称は"The Society for Research on Meteorites"と決められた。Leonardは"Research"という単語にこだわったと伝えられてる。これは、当時、隕石が研究対象となるという認識がいかにか一般常識からかけ離れていたかを物語るものである。Leonardは新しく設立された学会が趣味の集団ではないということのを会の名称に盛り込みたかったのであろう。設立集會に参加した会員は15名であったが、Leonardは積極的に会員獲得活動を行い、1933年9月1日現在で会員数は57名に達した。

隕石学会の年会は初期の頃はAmerican Association for the Advancement of Science(AAAS)と一緒に開催されることが多かった。1935年にはAAASの正式なメンバー(Associate member)となった。1937年に会長以下の役員の初めての変更があり、Harvey H. Niningerが2代目の会長に就任した。この時の会員数は105名に達し、アメリカを含めて11の国に及んでいる。当時すでに国際的な学会としての様相を帯びていた点が興味深い。そ

¹東京都立大学理学部

の専門領域も天文, 化学, 物理, 数学, 岩石鉱物学等, 広い範囲に渡っており, その傾向は現在の会員構成に引き継がれている点も注目される。また当時は13もの小委員会が設置され, かなり広範囲に渡って隕石学会, 及び隕石学を整備しようとの熱意がうかがわれる。歴代の会長名を表1に示す。

1946年に隕石学会の名称が従来の"The Society for Research on Meteorites"から, 現在の"The Meteoritical Society"に変更された。さらに, 隕石学会設立前からあったThe American Meteor Societyが隕石学会に合併吸収され, 隕石学会内にMeteor Sectionができた。戦争の影響は会のメンバーにも陰を落とし, 1940年に14ヶ国, 133人であった会

員数は, 新しく21人が加わったにもかかわらず, 8ヶ国, 110人に減少した。

その後会員数は徐々に増加し, 1966年には216人に達した。当時はアポロ計画が具体化し, 惑星科学者が大いに興奮していた時代であった。それに相応して, この頃, 学会内部で隕石学会の将来をどの様に方向づけるかについてかなりの議論がなされた。特に, 惑星科学者との連携をどの様にはかるかという点に焦点が当てられた。例えばAGUの中にPlanetology Sectionをもうけ, そこに移行する可能性, 隕石学会を惑星地質学者も取り込めるように拡大しながら変革する案, そのための名称変更の是非, 等々が真剣に議論された。その結論は現在の隕石学会の姿が示すとおり, 名称

Table 1. Presidents of The Meteoritical Society

Term	President	Affiliation
1933 - 1937	Frederick C. Leonard	Univ. of California, Los Angeles
1937 - 1941	Harvey H. Nininger	Colorado Mus. Nat. Hist., Colorado
1941 - 1946	Lincoln LaPaz	Ohio State Univ., Columbus
1946 - 1950	Arthur S. King	Mount Wilson Obs., Pasadena
1950 - 1954	Lionel F. Brady	Mus. of North. Ariz., Flagstaff
1954 - 1958	D. Moreau Barringer, Jr.	Barringer Crater Co., Philadelphia
1958 - 1962	John A. Russell	Univ. of Southern Calif., Los Angeles
1962 - 1966	Peter M. Millman	Nat. Res. Coun., Ottawa, Ont., Canada
1967 - 1968	Carleton B. Moore	Ariz. State Univ., Tempe
1969 - 1970	Klaus Keil	Univ. of New Mexico, Albuquerque
1971 - 1972	John A. Wood	Smithsonian Astrophys. Obs., Cambridge
1973 - 1974	Robin Brett	NASA Johnson Space Center, Houston
1975 - 1976	Ursula B. Marvin	Cen. Astrophysics, Cambridge
1977 - 1978	Paul Pellas	Mus. d'Hist. Naturelle, Paris, France
1979 - 1980	John T. Wasson	Univ. of California, Los Angeles
1981 - 1982	Vagn F. Buchwald	Tech. Univ. of Denmark, Lyngby
1983 - 1984	George W. Wetherill	Dept. of Terr. Mag., Washington, D.C.
1985 - 1986	Peter Eberhardt	Univ. Bern, Switzerland
1987 - 1988	Gerald J. Wasserburg	Calif. Inst. of Technology, Pasadena
1989 - 1990	S. Ross Taylor	Australian Nat. Univ., Canberra
1991 - 1992	Edward Anders	Bern, Switzerland
1993 - 1994	Heinrich Wanke	Max-Planck-Inst. fur Chem., Mainz
1995 - 1996	Harry Y. McSween	Univ. of Tennessee, Knoxville

の変更はなされなかったが、会の守備範囲をより広い領域に拡大する方向に進んだ。

1969年は隕石学会にとって、また隕石学会員にとって記念すべき年となった。この年の2月に Allende 隕石、9月に Murchison 隕石が落下した。この間、7月にはアポロ11号が月から帰還し、月の岩石試料を地球に持ち帰ることに成功した。さらに12月には日本の南極観測隊が南極大陸の大和山脈の裸氷帯の上に9個の隕石を偶然見つけた。これがその後の南極大陸における隕石の組織的な収集のきっかけとなったことは良く知られている事実である。

その後、アメリカばかりでなく、主としてヨーロッパからの会員が増加するにつれて AAAS との関係が議論する機運が生じた。そして、1976年に最終的に AAAS とのつながりを断つ決議がなされた。これはひとえに隕石学会が国際学会としての様相をますます色濃く帯びてきたためである。1987年には、反対にほかの研究者集団との連帯についてかなり具体的な話し合いがなされた。アメリカ天文学会 (AAS) の惑星科学部門 (Division of Planetary Science) が親学会を離れ、隕石学会と合流するという可能性であったが、種々の議論の末に結局この案もまとまらなかった。しかしこの話し合いは無駄ではなく、例えばヒューストンの月惑星科学会議などのような機会に合同のシンポジウムを開催するなどの効果を生んでいる。

隕石学会では、過去数十年に渡って、例えば国際天文連合 (IAU) や国際純正応用化学連合 (IUPAC) などの既存の国際的な学会連合に入るべきか否かについて議論されてきた。1991年にその議論に終止符を打ち、国際地質科学連合 (International Union of Geological Sciences, IUGS) に入会を申請し、翌1992年の京都における万国地質会議 (IGC) の開催中に行われた IUGS の評議会です承された。

3. Journal

(1) Society Journal

学会活動の大きな一つの柱である出版物の発行に関しても初代会長であった Leonard の功績は大きい。彼は月刊雑誌である "Popular Astronomy" (ミネソタ州 Carleton College の Doodsell 天文台発行) に "Meteor and Meteorites" と名付けたセッションを数ページの枠で執筆させてもらえるようとりつけた。さらに、毎年1月号に前年の12ヶ月分をまとめてリプリントとして印刷し、Contributions of the Society for Research on Meteorites (CSRM) として会員や博物館に配布した。Leonard は以後、通算25年間に渡ってこの編集者としての仕事を続けた。この Contributions は年毎に大きくなり、年次集会をはじめとする会の活動報告に加えて種々の研究論文も掲載され、たぶんに学術的になった。1946年、会の名称が The Meteoritical Society に変更されたのに伴って Popular Astronomy 誌上に掲載されていた Contributions も Contributions of The Meteoritical Society (CMS) に名称変更された。

1951年 Popular Astronomy が廃刊になったのをうけて、翌1952年のアルバカーキで開催された隕石学会の評議会の席上で、季刊の新しい雑誌を出版することが決まった。誌名を Meteoritics, the Journal of The Meteoritical Society and of the Institute of Meteoritics of the University of New Mexico とし、1953年始めに第1号が発行された。この誌名にある研究所は1941年から Leonard がその必要性を説いていたもので、1952年に完成した。Meteoritics はその後、1956年の Vol. 1, No. 4 を最後に一時出版が途絶え、1963年に Barringer Crater Company の財政的援助を受けて Vol. 2, No. 1 として復刊した。時の編集長は長年 Sky & Telescope 誌の副編集長をしていた Dorrit Hoffleit であった。この号は1960年に亡くなった F.C.

Leonard に捧げられた。

1966年から67年にかけて、Meteoriticsの将来について廃刊の可能性も含めてかなりの議論がなされた。問題点は支出とその価値のバランスに集約されるものであったが、結局存続させる方向で結論が得られた。1968年にはCarleton B. Mooreが編集長に任ぜられ、編集室をアリゾナのテンピに移した。彼は1969年にMeteoritics Vol. 4のNo. 3とNo.4を発行し、以後毎年4冊ずつ発行した。さらにMooreは紙面の刷新を図るべく、体裁から掲載される論文の質の向上まで種々の配慮を行った。年会の要旨をMeteoriticsに掲載する方針もさんざん議論されたが、結局毎年の最終号に掲載することに決まり、その形式は1969年以降現在まで踏襲されている。財政的には無駄との指摘はあるものの、その時々新しい研究動向を知る資料となり、さらには過去の隕石学の流れをたどることができる貴重な資料となっている点も見逃せない事実である。Mooreの努力の甲斐があって、1984年にはMeteoriticsがCitation Index Impact Awardを獲得することとなった。このことは惑星科学の分野において、同誌が重要な位置を占めるに至ったことを示すものである。

その後もMeteoriticsをより質の高い雑誌とする努力が続けられた。その結果、1987年に編集体制を一新することになり、新しい編集者にUCLAのJohn A. Wassonが任命され、Mooreの18年に及ぶ編集者としての奉仕は終了することになった。新しいMeteoriticsは従来の大きさ、デザインを一新し、内容的にも種々の工夫がなされたが、なかでも論文の質を高めることに最大の努力が払われた。その結果、Meteoriticsは1984年から1990年までの統計で、地球科学関連の42 (!) の雑誌のうち、4番目に高い被引用率を記録した。これは、第6位のGeochimica et Cosmochimica Acta, 7位のEarth and Planetary Science Lettersをしのぐものであっ

た。

Meteoriticsの編集は1992年からはアーカンソー大学のDerek W.G. Searsがその責務を果たしている。彼は基本的にはWassonの編集方針を踏襲しながらも種々の工夫を凝らした。各号に掲載されるレビュー論文は其中でも非常に好評で、高い引用率を記録している。さらに、従来は年会の発表論文の要旨をその年の最終号に掲載していたものを、あらたに1巻追加して年会時に間に合うように印刷・出版した。さらに、1994年からは隔月刊の年6冊の発行に入った。これは、ここ数年投稿論文数が急激に増加しているためで、現在の予算との関係で年6冊がぎりぎりのところであるが、将来的にはその数を増やすことも考えられている。その場合、雑誌購入代金を年会費と切り離して徴収する案も議論されることになろう。

(2) Geochimica et Cosmochimica Acta

1969年、Edwad Andersは隕石学会が地球化学会(The Geochemical Society)と共にGeochimica et Cosmochimica Acta (GCA) 誌のco-sponsorとなる可能性を探り、その結果翌1970年のVol. 34, No.1からGCAの表紙に"Journal of The Geochemical Society and The Meteoritical Society"と印刷されることとなった。また、購読料についてもThe Geochemical Societyの会員と同様の割引率が適用されることに合意された。AndersはGCAの質を向上させるためにも多くの貢献をした。例えば、1970年代はじめにはGCAに投稿された論文が印刷・出版までに時間がかかりすぎる点を指摘し、学会を代表してこれを短縮するための交渉を行った。一方、評議会は当時のGCA編集長のDenis M. Shawを評議会に出席するよう招待する決議をした。Shawの任期は1987年まで続いたが、この間の隕石学会とGCAの関係はすこぶる良好なものであった。

Shawの退任後、編集長にはオハイオ州立大の

Gunter Faure が選ばれた。Faure と隕石学会との距離は Shaw と隕石学会との距離に比べて遥かにといてよいほど遠く、従来の良好な関係は望めなくなる要素はあった。ちょうど契約更新の時期に当たり、新しい契約が従来よりも出版社(Pergamon Press) 主導での発行となる要素を強く持つものであった。これを検討する出版委員会で大きな不満が生じ、さらに隕石学会と地球化学会の委員の間でも意見の対立が生じ、契約更新はスムーズにことが運ばなかった。この間 Pergamon Press が Elsevier Publishing Company に買収されるという事態も生じたが、契約更新に伴うぎくしゃくした関係は好転しなかった。種々の議論を経て、両学会とも 1995 年の契約終了時までは GCA の協賛学会となることを取り決め、それ以降は白紙とすることを決議した。おそらく、今後 GCA は商業誌的色彩をより濃くしながら発行されることになるものと思われる。隕石学会が今後新しい雑誌を発行するのか、あるいは Meteoritics に一本化するのかについては今後の検討課題となろう。

4. Annual meeting

第 1 回目の年会は 15 人の参加者を得、1933 年、シカゴのフィールド博物館で行われた。これはすでに記したとおり隕石学会の設立総会であった。初期の頃の年会は AAAS と共催で行われることが多く、隕石学会員としての年会参加者数はかなり少なかった。1937 年の第 5 回年会はデンバーで行われ、27 人の会員が参加し、アメリカ以外の国からの分も含めて 23 の論文の発表があった。

戦後初めての年会は 1946 年 9 月にアリゾナのフラグスタッフで開催された。26 人の会員の参加があり、24 の論文（うち 2 件はタイトルのみ）が発表された。その後 1956 年、インディアナ州ブルーミントンのインディアナ大学で開催された第 19 年会のように参加者 7 人という会もあったと記録さ

れているが、おおむね会の規模は年と共に大きくなった。特に、1966 年、ワシントン D. C. のスミソニアン博物館で開催された第 29 年会は大変盛況で、117 人の参加者と 72 件の発表を記録した。

1971 年の年会は西ドイツ（当時）のチュービンゲンで開催された。これはアメリカ以外の地で開催された初めての年会であった。参加者数は 155 人に及び、ゲスト参加者も 46 人を数え、これまでの記録を更新することとなった。この年以降、1989 年のウィーン大学で開催された第 52 年会まで、アメリカとヨーロッパで交互に開催された。

1990 年の第 53 年会はオーストラリアのパースで開催された。この会がアメリカとヨーロッパ以外で開催された初めての年会であった。米・欧以外で開催することについては賛否両論があり、旅費がかかるために参加者が減少するというのが最大の問題点として指摘された。事実、参加登録者数は 247 人と、前年のウィーンが 450 人、翌年のカリフォルニア州、モンレーが 380 人であったのに比べて大幅に減少した。パースの開催を契機に今後も米・欧以外で年会を開催することは会の方針として決まったが、その間隔は 7 年から 10 年くらいを一応の目安とすることになった。これまでの年会開催地の一覧を表 2 に示す。

今後の開催地としては現時点で、1995 年のワシントン (U.S.A.)、1996 年のベルリン (ドイツ)、1997 年のハワイ (U.S.A.) まで決定されている。隕石学会開催地の決定は評議会でなされるが、そこに至るまでに一定の手続きがとられる。まず、開催希望地から会長（あるいは評議会）宛に開催を希望する旨、書面で意志表示を行う。この点が日本の学会や討論会の開催地決定のプロセスと異なるところである。この書面は簡単な意志表示のこともあればかなり具体的な招待状のこともある。評議会で審議されるときにはかなり具体的な青写真の提出を求められる。そこには、例えば開催予

Table 2. Annual meetings of the Meteoritical Society (including plans for 1995 and thereafter)

Year	Place	Year	Place
1 1933	Field Mus. of Nat. Hist., Chicago	31 1968	Smithson. Astrophys. Obs., Cambridge
2 1934	Univ. of Calif., Berkeley	32 1969	Manned Space Craft Center, Houston
3 1935	Univ. of Minnesota, Minneapolis	33 1970	Goddard Space Flight Ctr., Mtg. at Skyland, Va
4 1936	Univ. of Calif., Los Angels	34 1971	Mineralogische Inst., Tübingen, W. Germany
5 1937	Colorado Mus. of Nat. Hist., Denver	35 1972	Univ. of Chicago, Chicago
6 1938	The Mosque, Richmond, Va.	36 1973	Davos, Switzerland
7 1939	Ohio State Univ., Columbus	37 1974	Univ. of Southern Calif., Los Angeles
8 1941	Mus. of Northern Ariz., Flagstaff	38 1975	Université François Rabelais, Tours, France
9 1946	Ariz. State College, Flagstaff	39 1976	Lehigh Univ., Bethlehem, Pa.
10 1947	U.S. Grant Hotel, San Diego	40 1977	Cambridge Univ., England
11 1948	Univ. of New Mexico, Albuquerque	41 1978	Laurentian Univ., Sudbury, Ont., Canada
12 1949	Univ. of Southern Calif., Los Angeles	42 1979	Max-Planck Inst. fur Kernphysik, Heidelberg, W. Germany
13 1950	Mus. of Northern Ariz., Flagstaff	43 1980	Univ. of Calif., San Diego
14 1951	Univ. of Southern Calif., Los Angeles	44 1981	Universitat Bern, Switzerland
15 1952	Univ. of New Mexico, Albuquerque	45 1982	Washington Univ., St. Louis
16 1953	Univ. of Penn., Philadelphia	46 1983	Max-Planck-Inst. fur Chemie, Mainz, W. Germany
17 1954	Univ. of Calif., Berkeley	47 1984	Univ. of New Mexico, Albuquerque
18 1955	Univ. of New Mexico, Albuquerque	48 1985	Univerite de Bordeaux, France
19 1956	Indiana Univ., Bloomington	49 1986	American Mus. of Nat. Hist., N.Y.
20 1957	Univ. of Calif., Los Angels	50 1987	Univ. of Newcastle upon Tyne, U.K.
21 1958	Winslow, Ariz.	51 1988	Univ. of Arkansas, Fayetteville
22 1959	Smithson. Astrophys. Obs., Cambridge	52 1989	Universitate Wien, Austria
23 1960	Univ. of Southern Calif. Los Angeles	53 1990	Perth, Australia
24 1961	Maria Mitchell Obs., Nantucket Is., Mass.	54 1991	Monterey, Calif.
25 1962	New Mexico Inst. Mining & Tech., Socorro	55 1992	Univ. of Copenhagen, Denmark
26 1963	Ottawa, Ont., Canada	56 1993	Vail, Colo.
27 1964	Ariz. State Univ., Tempe	57 1994	Prague, Czech Republic
28 1965	Odessa, Tex.	58 1995	Smithson. Inst., Washington, D.C.
29 1966	Smithson. Inst., Washington, D.C.	59 1996	Berlin, Germany
30 1967	NASA Ames Res. Ctr., Moffet Field, Calif.	60 1997	Univ. of Hawaii

定日時、会場、宿泊施設の情報が盛り込まれる。審議の対象となるもののうち関心の高い事項は登録費、宿泊費で、中でも学生用の安価な宿泊施設が利用できるかどうかに関心が寄せられる。従来の年会の登録費が250ドル前後で、懇親会やその他の歓迎行事に付随する費用を含むという内

容は、最近多く開催される一週間程度の国際学会の平均からするとかなりコストパフォーマンスの高いものといえよう。学生の参加を積極的に支援するという点では、宿泊費の低廉な宿舎の確保と共に旅行費用の補助を行うなど、特に深い配慮が払われている。この学生の旅費の補助がどの程度

可能であるかも、開催地決定の際に参考とされる。

1998年以降の開催地については、現時点ではまだ決められていない。現在、南アフリカのヨハネスバークとアイルランドのダブリンから正式な招待状が寄せられている。ヨハネスバークは米・欧以外の地での2回目の開催として名乗りをあげ、ダブリンはハワイ(U.S.A.)の後を受けのヨーロッパの開催ということになる。1994年のプラハでの年会の際の評議会が両地での開催について、かなり詳細な説明がなされた。特にヨハネスバークで開催を希望するグループの熱意は大変なもので、かなり豪華な観光用印刷物を配布し、スライドを用いた説明は準備周到なものであった。一方、ダブリンの側は従来通りのもので、必要最低限の情報をもとに簡にして要を得た招待演説を行った。1998年の開催地がどこになるかは、本年の3月、ヒューストンで開催される第26回惑星科学会議(LPSC)の前日に開かれる隕石学会の評議会が決定される予定である。なお、ヨハネスバーク、ダブリンの両地での開催に関して各会員に意向を尋ねるべく、過日、隕石学会からアンケートが郵送された。これは異例のことで、一つにはヨハネスバークが地域的にかなり異色の地であり、どの程度の参加が見込まれるのかを把握したいためであり、また米・欧以外での開催をどの程度会員が支持するかを知りたいとの意向のためである。最終決定権は評議会が持つので、アンケート結果はあくまでも参考資料として取り扱われるものである。

ところで、1998年から2000年にかけて日本で隕石学会を開催しようとの機運が一部の会員の中に高まり、かなり具体的に動き出しつつある。これは神戸大学の中村昇教授を中心とするグループによるもので、当初、上記のヨハネスバークやダブリンと競争する形で名乗り出るように検討された。それは、もし1998年にヨハネスバークで年会が開催されることが決定されると、次の米・欧以外の

地での開催はそれからさらに7年から10年後となるからである。今までも、会員数から考えれば日本で開催するのは当然で、ある意味で義務であるとの意見が国内外の会員の間に非公式に囁かれていた。そこで神戸大の中村氏が名乗りをあげるようになったのであるが、結果としてタッチの差で上記の2地に遅れることになった。しかし、神戸での開催に関する意思表示は評議会では受理されており、今後評議会での開催に関して議論される予定である。その場合、ヨハネスバークでの開催があるのか、ないのかがかなり大きく影響することになるし、その前にヨハネスバークでの開催をするかしないかに関する議論でも神戸の立候補は微妙な影響を与えることになるものと思われる。ただ、神戸の開催で一つ危惧されるのはこの度の関西大震災の影響である。おそらく1998年から2000年には神戸の街は大学も含めて見事に立ち直っているものと予想されるが、ここ数年の誘致に向けての熱意をどの様に維持し、また表明していくかが問題である。周辺の研究者のバックアップが是非とも必要とされる場所である。

5. メダル (学会賞)

現在、隕石学会にはレオナルド・メダルとバリンジャー・メダルの2つのメダルがあり、毎年原則として1名ずつに贈呈される。選考の手続きとしては、まず会員からそれぞれのメダル選考委員会宛に候補者を推薦をする。各選考委員会では推薦された人の中から候補者を絞り、順位を付けて会長に答申する。会長は評議員会に諮り、授与者を決定する。

(1) レオナルド・メダル

F.C. Leonardの死後、彼の未亡人や息子たちを中心としてLeonardの名前を冠したメダルを創設する動きが起こった。少なからぬ会員からの賛同、援助も得られ、1966年、ワシントンD.C.のスミソ

ニアン博物館で開催された隕石学会第29年会の席上で第1回目のレオナルド・メダルの授与式が行われた。授与されたのはオタワのドミニオン観測所 (Dominion Observatory) の Carlyle S. Beals であった。以後、現在まで毎年1名のメダリストが選ばれている。なお、日本人では、本田雅健東大名誉教授が1987年にこのメダルを授与されている。表3に歴代のメダル受賞者の一覧を示す。

(2) バリンジャー・メダル

1983年のマインツでの第42年会の席で、Barringer Crater Company がバリンジャー・メダルを創設すると発表した。このメダルは Daniel M. Barringer のクレーター研究における先駆的な仕事を顕彰する目的で創設されたもので、衝突現象を科学的に解明しようとする研究者を対象に贈られる。

1984年に第一回目のメダル贈呈式が行われ、Eugene M. Shoemaker に授与された。レオナルド・メダル同様、現在まで毎年一名にメダルが贈られている。受賞者の一覧を表4に示す。

6. 終わりに

筆者は1991年から1994年まで2期にわたって隕石学会の評議員を仰せつかった。この間できるだけ努力をしたつもりであるが、必ずしも満足のいく活動ができなかったと反省している。例えば、隕石学会の年会を日本で開催する件に対しても、もう少し早く行動をとるべきであった。本稿は評議員としての責任を少しでも果たすことになれば、との意図のもとにまとめたものである。内容の多

Table 3. Leonard Medalists

Year	Awardee	Year	Awardee
1966	Carlyle S. Beals	1981	George W. Wetherill
1967	Harvey H. Nininger	1982	Robert N. Clayton
1968	Ernst Öpik	1983	Johannes Geiss
1969	Harold C. Urey	1984	B. Y. Levin
1970	Fred L. Whipple	1985	Eugene M. Shoemaker
1971	E. L. Krinov	1986	Ralph B. Baldwin
1972	Brian Mason	1987	Masatake Honda
1973	John H. Reynolds	1988	Klaus Keil
1974	Edward Anders	1989	V. S. Safranov
1975	Gerald J. Wasserburg	1990	Peter Eberhardt
1976	James A. Arnold	1991	Donald D. Clayton
1977	Hans E. Suess	1992	John T. Wasson
1978	John A. Wood	1993	Robert M. Walker
1979	Paul A. Ramdohr	1994	Alastair G. W. Cameron
1980	Heinrich Wanke	1995	F. Begemann

Table 4. Barringer Medalists

Year	Awardee	Year	Awardee
1984	Eugene M. Shoemaker	1990	Richard A. F. Grieve
1985	Robert S. Dietz	1991	V. Masaitis
1986	Donald E. Gault	1992	E. C. T. Chao
1987	Wolf J. von Engelhardt	1993	Dieter Stöffler
1988	Michael R. Dence	1994	D. W. Roddy
1989	Virgil E. Barnes	1995	W. A. Cassidy

くは Ursula B. Marvin が1993年に Meteoritics に発表したもの ("The Meteoritical Society: 1933 to 1993", Meteoritics 28, 261-314, 1993) によっている。なお、1995年からの評議員には永原裕子さん (東大・理) が選出されている。日本の隕石科学、ひいては惑星科学の発展のためにご活躍を期待する。